Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-02

長崎・軍艦島におけるダークツーリズム ：「まなざし」の構築に着目して

伊藤, 大貴

(Citation)
兵庫地理,63:57-76

(Issue Date)
2018

(Resource Type)
journal article

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90005207

兵庫地理 63（2018）57-76

長崎・軍艦島におけるダークツーリズム

－「まなざし」の構築に着目して－

伊藤 大貴

Ⅰ．序論

1．研究目的

人類の歴史には負の遺産 [1]が存在する。過去の戦争や災害は人間に苦痛や悲劇、時には死をもたらしてきた。苦痛を受けた人々は悲しみの記憶を記録し、保存することで次世代に伝えようと努めてきた。現代を生きる人間が過去の歴史に目を向けると、そこには現在の価値観に照らし合わせて「ダークネス」とされる出来事がある。本稿における「ダークネス」とは、人間の苦痛であると定義づける。人間の苦痛とは、身体的な痛みのみならず、差別による苦難や苦労など精神的な痛みを含んだ概念を指す。本稿の目的は、戦争や災害といった人類の歴史における「ダークネス」を帯びた遺産を保存し、展示する行為や現象をツーリズムの観点から検討することである。

負の遺産を観光資源とするツーリズムは Foley& Lennon (1996)らが Dark Tourism という概念を提示して以降、日本ではダークツーリズムとして理解されている。そして現在、ダークツーリズムを実践する人々、いわゆる「ダークツーリスト」が増えつつある。2017 年のアウシュヴィッツ強制収容所の年間来場者 は 210 万人を記録した [2]。直近 10 年で来場者が約 4 倍に増えたことは、「ダークツーリスト」が一般化しつつある証拠だと考えられる。

本稿の問題意識は以下の通りである。①軍艦島におけるダークツーリズムは誰にとってのダークネスであり、誰にとってはダークネスではないのか。②軍艦島でダークツーリズムを成立させるためのツーリストの動機やツーリストの心情はいかなるものなのか。③いわゆる「ダークツーリストのまなざし」はいかにして構築されるのか。④軍艦島におけるダークツーリズムはいかなる社会的欲望に支えられたツーリズムなのか。これらの 4 つの問いを考察する。

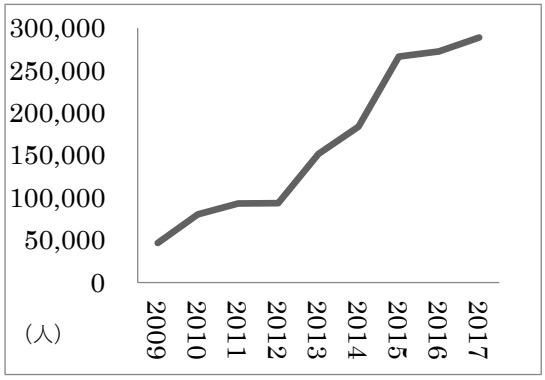
本稿では、2015 年に世界遺産へと登録された「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の構成資産の一つである長崎市高島町にある軍艦島＝端島 [3]に焦点を当てる。本稿でこの地域を研究対象とする理由は、「明治日本の産業革命遺産」において軍艦島は遺産の顔としてみなされており、廃墟という視覚的なインパクトを有するツーリズムに適した非日常的な遺産として認知されているからである。さらに、日本政府は「明治日本の産業革命遺産」の宣伝を通して日本の近代化を称揚する動きを見せており、軍艦島は国家によるイデオロギー的な支配を支える政治的存在として捉えることが可能である。

軍艦島とは、石炭の採炭を通して日本の近代化を支えた代表的な近代化遺産であると同時に、戦前・戦時下の時期において朝鮮半島や中国の人々が強制的に働かされていたという負の歴史を有する場所でもある。日本国内のダークツーリズム研究において、軍艦島が持つ特異な点は、ヒロシマやナガサキ [4]とは異なり、日本人が加害者側となる側面を強く有する遺産である点にあると考えられる。

世界遺産への登録によって、軍艦島を訪れるツーリストの数は下記に示す通り年々、増加傾向にあり、海外から訪れるツーリストも目立つようになりつつある。その結果、ローカルな辺境の島として長らく放置されてきた軍艦島は、グローバルな価値づけである世界遺産として語られる存在へと変化した。このような事情を有する軍艦島を取り扱った先行研究として、炭鉱時代のコミュニティや軍艦島住民の生活実態を明らかにした井上(2010)や戦前・戦時下の強制労働と人権問題について論じた柴田(2010)が挙げられる。しかし、軍艦島をツーリズムの対象として捉えた研究は少ない。木村(2007・2009・2010・2014)は世界遺産への登録以前の軍艦島ツーリズムの現状

を分析したが、軍艦島が有する負の歴史とツーリズムの関わりを十分に論じていない。ダークツーリズムの対象として軍艦島を取り扱った研究や世界遺産登録後の軍艦島ツーリズムにおけるまなざしの構築について取り扱った研究は現在のところ存在しない。

本稿では、ダークツーリズムをキーワードとして、ツーリストへの聞き取り調査をもとに、先述した問題意識を通してダークツーリズム概念の考察を図る。研究対象である軍艦島のデータは、2017 年 11 月に行ったフィールドワークから得られたものであり、軍艦島に関わる文献や聞き取り調査による情報収集を含んだものである。軍艦島を訪れたツーリストから聞き取りを行い、様々な行政資料や観光パンフレット、新聞など広く情報収集から得られたデータを分析対象とした。これら資料から軍艦島観光におけるツーリストの「まなざし[5]」の解釈を試みた。



第 1 図 軍艦島上陸者数の年別変化

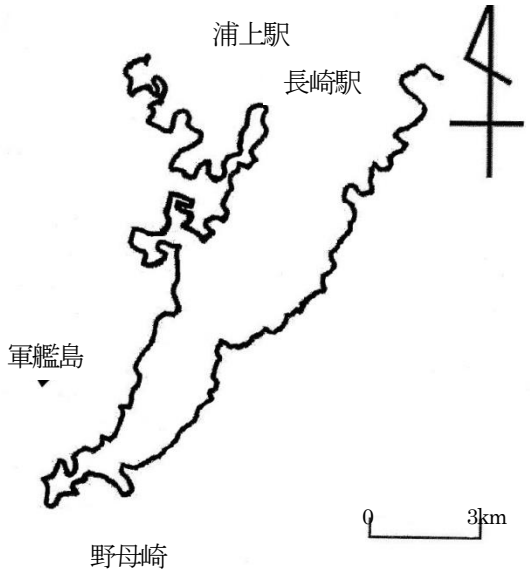
出典)『平成 28 年長崎市観光統計年鑑』より作成

第 2 図 軍艦島の全景

出典) http://whc.unesco.org/en/list/1484/gallery/

２．本稿の構成

本稿は以下の構成からなる。2 章では、Urry による「観光のまなざし Tourist Gaze」のレビューをした上で現在のダークツーリズム研究を述べ、本稿のキーワードとなる「ダークツーリストのまなざし」について論じる。3 章では、研究対象である軍艦島の概要を述べ、韓国映画「軍艦島」の分析を行い、現状の軍艦島ツーリズムにおいて実践されているツーリストのまなざしを分析する。4 章では、結論を提示し、残された課題と今後のダークツーリズム研究の展望について述べる。



第 3 図 軍艦島と長崎市中心部との位置関係地図

Ⅱ．ダークツーリズム研究

１．ツーリストのまなざし

Urry(1990・1995)の「ツーリストのまなざし[6]」とは、病気の診断が医師に委ねられるという Foucaul(1963)の「医学のまなざし」に着想を得た、ツーリストのまなざしを向ける対象がどのようにして構築されるのかに着目した概念である。Urry(1990)によると、ツーリストのまなざしとは、ツーリストが所属する文化、社会の記号システムによって構成されるものである。そのまなざしの対象は、日常とは対称的な非日常でなければならない。

しかし、この非日常は完全な非日常ではなく、ツーリストにとっての最低限の利便性や安全性が確保された「ある程度の日常性を有した非日常」である。さらに、この非日常は楽しみが期待されるものでなければならない。Urry の主張する「ツーリストのまなざし」の特徴を以下にまとめる。

第1表　「ツーリストのまなざし」の概要

①「ツーリストのまなざし」は、映画や書籍といったメディアから構築され、強化され、支えられる。
②「ツーリストのまなざし」は、映画や書籍といったメディアに内在する記号群に大きく依存する。
③「ツーリストのまなざし」は、映画や書籍、写真などを通して視覚的に対象化される。まなざしは実物をメディアの発するイメージから確認し、メディアの発するイメージを実物で確認するといった再生産・再構築を繰り返す。

出典) Urry(1990)

Urry (1995)は、「ツーリストのまなざし」を2つに分けて論じた。「ツーリストのまなざし」には、「ロマン主義的まなざし」と「集合的まなざし」という二種類の見方がある。「ロマン主義的まなざし」とは、まなざしの対象との個人的で精神的な関係を重視する見方である。一方で、「集合的まなざし」とは、「ロマン主義的まなざし」とは異なり、他者の存在を必要とする賑やかな見方である。Urry によると、観光地には「ロマン主義的まなざし」を必要とする観光地と「集合的まなざし」を必要とする観光地があり、それぞれツーリストによって求めるものが異なってくるとされる。「ロマン主義的まなざし」を必要とする観光地では、ツーリズム対象とツーリスト自身の情緒的な関係が重要となるため、自分以外のツーリストの存在は好まれない。逆に、「集合的まなざし」を必要とする観光地では、自分と同じようなツーリストがいることが重要であり、賑わっていることが楽しむための必要条件である。

ツーリズムは空間的な移動をともなう行為であり、まなざしを向けられるその対象は、ツーリストの日常空間の範囲を抜け出した他の場所である。そのため、他の場所に対する地理的な想像力がツーリズムの基本的な動機であり魅力である。他の場所に対する地理的な想像力によって喚起された魅力的な非日常のイメージがツーリズム空間に対して投影されていると Urry は主張した。

第2表　「ツーリストのまなざし」の諸形態

ロマン主義的まなざし the romantic gaze	孤独
	没入状態の持続
	幻視・畏敬を伴うまなざし
集合的まなざし the collective gaze	コミュナルな活動
	一連の共有された出会い
	親しんだものへのまなざし

出典) Urry(1995)

2．ダークツーリズム研究

ダークツーリズムとは、戦争や災害、差別、公害など人間の苦痛に携わった場所にツーリストが訪れる行為である。その名称が示す通り、ダークツーリズムとは、人間の過去の記憶の悲惨で苦痛な側面に対する興味関心から惹起されるツーリズムである。

このようなツーリズムの在り方をめぐって、ツーリズム研究者らは Black Spot Tourism (Rojek, 1993)、Thanatourism (Seaton,1996)、Heritage of Atrocity (Tunbridge＆Ashworth,1996)など様々な用語で言及してきた。しかし、最終的には 1996 年に Foley＆Lennon によって投稿された学術誌に用いられ、2000 年に出版された『Dark tourism The attraction of death and disasters』が契機となって Dark Tourism という用語が普及した。

上記のツーリズム研究者らが検討した人間の苦痛の場所には、墓地、戦場、有名人の死亡した場所、災害が起こった場所、刑務所、拷問部屋、虐殺現場などが挙げられている。具体的な場所としては、ニューヨークの世界貿易センター跡地グラウンド・ゼロやサンフランシスコのアルカトラズ監獄、ダラスのケネディー大統領暗殺現場、パリのペール・ラシェーズ墓地などがあり、いずれも毎日のように世界中からツーリストを惹きつけている場所である。

Foley＆Lennon (2000)の定義によると、ダークツーリズムとは、メディアによって形成されたイメージの背後にあるリアリティを経験しようとする欲求や非人間性を経験しようとする欲求によって動機づけられ、現在を生きる我々に近い過去における人間の死や戦争、災害、差別、残虐行為にかかわる場所に訪れる人々による現象である。Foley＆Lennon(2000)の分析はタイタニック号の沈没から始まり、ダークツーリズムを 20 世紀までの科学技術の発達と近代由来の人権や平等といった価値に対する不安が生み

出したポストモダン文化の産物として捉えた。そして、ユダヤ人の大量虐殺をもたらした科学技術の使用や不沈船と呼ばれたタイタニック号を沈没させた技術の失敗などが示唆するのは、科学技術の発達が社会を栄光の未来へと導くわけではないということだと主張した。そして、ダークツーリズムの意義を敢えてネガティブな出来事をまなざすことで、モダニティの揺らぎを実感することに求めた。

ダークツーリズムという現象は Foley＆Lennon (1996・2000)によって概念付けられ、名付けられた現象である。しかし、人類の歴史におけるダークな側面が、今までツーリズムに活用されてこなかったというわけではない。ダークツーリズムという概念が提起される以前から、日本では追悼と学習を目的に、ヒロシマやナガサキ、沖縄の戦跡、足尾銅山、水俣病資料館、ハンセン病療養所などを訪れる人々が存在していた。しかしながら、そのような場所への来訪はツーリズムという文脈ではなく、平和教育や環境教育、人権教育といった別の文脈で語られていた。遠藤(2016)はダークツーリズムという概念の目新しさは、地域も文脈も異なる事象が、その違いを乗り越えて人類の歴史をめぐる負の遺産としてまとめて論じることを可能にする点にあると主張した。

日本においてダークツーリズムという概念を初めて用いたのはフンク(2008)である。フンクはダークツーリズムを「学び」を目的としたツーリズムとして捉え、ダークツーリズムの対象を戦争に関連する場所、強制収容所、核や原子力に関連する場所、環境汚染の現場、災害の現場、監獄や刑務所、殺人事件の現場といった場所別に分類した。フンクによると、ダークツーリズムは必ずしもホスト社会が期待するような「学び」や「悼み」といった動機のツーリストによってなされているわけではなく、怖いもの見たさや悲劇を知ることで自らの幸福を実感したいといったホスト社会が期待していない動機で訪れるツーリストも多いとされる。一方で、ホスト社会側もツーリストに対して分かりやすく、感動的に語ろうとする傾向があるため、脚色が加えられ、結果的に悲劇の真正性が失われやすいと指摘している。

現在の日本におけるダークツーリズム論の中心的論者である井出(2013)はダークツーリズムを「戦争や自然災害の跡を観光資源として捉え、そこを訪問することで悲しみを共有し、死者を悼む営為」と定義した。井出の主張の特徴は、フンクとは異なり、ダークツーリズムを「悼み」を目的としたツーリズムとして捉えていることである。井出(2013)は、修学旅行などで原爆ドームやひめゆりの塔などを訪問することは教育観光であり、悲しみの共有や追悼を主要な目的としていないことからダークツーリズムの本義から少し外れた行為だと述べた。井出(2013)は、ダークツーリズムの意義は特定の場所における悲しみの継承と追悼にあり、そこでは副次的な効果として「学び」も行われるが、「学び」はダークツーリズムの核心ではないと主張した。

井出(2015)は近代化遺産とダークツーリズムの関係についても述べている。近代化はその初期段階において労働者の健康を省みることはなかった。近代化は熟練工から仕事を奪い、炭鉱などの劣悪な環境で女性や子どもを含めた低賃金の未熟練労働者による長時間労働を生み出した。同時に、自然の回復力を超える近代化＝工業化は公害や環境破壊を引き起こした。近代という言葉で説明される時代は、圧倒的多数の搾取される人々を生み出したという点で、一般市民にとっては明るい時代ではなく、むしろ耐え難い悲しみを湛えていた時代である(井出,2015)。そのため、近代を象徴する遺産をたどるツーリズムは必然的にダークツーリズムとしての特性を有することになる(Stone,2016)。近代化遺産は光と影の両面をもった存在である。遺産のもつ影の側面に惹かれて訪れる、もしくは現地で過去の人間の苦痛を知り、悼む感情が生じることでダークツーリズムとしての意味が付与されると考えられる。

ダークツーリズムとして近代化遺産を解釈した場合、その遺産は苦しみの文脈で理解されることになる。しかし、近代化遺産は影だけではなく光の側面をもっているため、光と影の一体感を伴った存在としてツーリストの前に立ち現れる。近代化遺産におけるダークツーリズムとは、敢えて人間の歴史や記憶を影の部分から辿ることで、光の部分を含めた近代の全体像を明らかにしていこうという方法論であ

る(井出,2015)。光の部分から近代化遺産を解釈した場合、過去に生じた人間の苦痛、負の歴史と向き合うことへの困難さから、歴史の影の部分への考察が薄くなりがちである。逆に、過去に生じた人間の苦痛から近代化遺産をまなざすことで、歴史における光と影の両面を知り、近代という時代の多面性を理解することができると考えられる。

３．ダークツーリストのまなざし

ダークツーリズムを実践するダークツーリストとは、他者の苦痛や悲劇の物語に対して、ある種の楽しみを見出す存在である(市野澤,2016)。その動機は野次馬的な好奇心や他者の不幸を覗き見する欲望を含めて多岐にわたると推測される。動機はともあれ、その場所における過去の苦痛や悲劇に関する情報を知っていなければ、ダークツーリストとして人間の苦痛がかつて生じた場所に訪れることはないと考えられる。しかし、特定の場所における負の歴史を知らずに訪れたツーリストであっても、現地における展示やガイドによる解説によってダークツーリストになる可能性は十分にあると考えられる。

遠藤(2016)は人間の苦痛や悲劇が興味を引く要素であり、ダークツーリズムに関わる人々がその場所を「訪れるべきダークネス」としてみなすことでその場所はダークツーリズムの観光地となると指摘した。過去に強烈な人間の苦痛や悲劇、その結果としての死が生じた場所であったとしても、現在においてその記憶が残っておらず、ツーリストが「悼むべき価値・学ぶべき価値があるダークネス」としてまなざしを向けるように方向づけられていなければ、ダークツーリズムの対象にはならない。遠藤(2016)は、地域の歴史や記憶、場所のイメージをめぐるローカルな政治性が「ダークツーリストのまなざし」を創り上げると主張した。遠藤(2017)はその事例として鹿児島県の知覧特攻平和会館を挙げ、「ダークツーリストのまなざし」の構築に寄与したのは百田尚樹の小説『永遠の 0』(2006)であると考察した。

井出(2015)は、日本人にとっての観光は負の要素、影の部分が自動的に排除される傾向にあると主張した。日本社会は歴史の影の部分の承継が得意ではなく、栄光の文脈で過去を語ろうとする傾向にある。一方で、キリスト教文化の根付く欧米社会は、「天使と悪魔」や「天国と地獄」といった二元論的な世界観が根付いているため、過去の記憶を受け継ぐ際に、自然と影の部分も承継されやすいとされる。井出(2015)は日本社会における観光地化が歴史の影の部分である負の遺産を自然と覆い隠してしまった例として石見銀山を挙げた。世界遺産に登録される以前の石見銀山の地図には、石見銀山で銀を盗むなどした犯罪者を処罰した処刑場とその遺体を投げ捨てた千人壺が掲載されていた。しかし、世界遺産への登録後は地図からその掲載がなくなってしまったことを指摘し、観光地化に伴って日本では負の遺産が隠蔽される傾向にあると主張した。そのため、負の遺産があったとしても、現在に至る悲しみの記憶が残っておらず、それが「悼むべき価値・学ぶべき価値があるダークネス」として位置づけられず、隠蔽されてしまうのであれば、「ダークツーリストのまなざし」は構築されることはないと考えられる。

今日のダークツーリズムを論じる議論を俯瞰すると、ダークツーリズムに携わる多様なアクターのうち、ダークツーリズムの提供者つまりツアーガイドや記憶の展示者の意図を論じるものが多い一方で、ツーリストが実際にダークネスをまなざすことでどのような感覚を獲得したのかを論じる研究は少ない傾向にある(Frew＆White,2013)。

その理由として市野澤(2016)は、Urry(1990)の「ツーリストのまなざし」は社会的に構築されたものの見方であるが、この「ツーリストのまなざし」よりも「ダークツーリストのまなざし」の方がより政治的なものであり、誘導性が強いからではないかと考察した。通常の「ツーリストのまなざし」とは異なり、「ダークツーリストのまなざし」は、まなざしの構築者や誘導者による政治的な仕掛けやアカデミックな言説によって支えられることで成立する傾向にあり、通常の「ツーリストのまなざし」よりも一層、人為的で仕組まれたものの見方であると考えられる。

市野澤(2016)は、このようなまなざしを仕向け、仕立てあげるアクターとして考えられるのは、歴史を取り扱う能力をもった存在であり、その知識を用い

てツーリズムに意味づけをおこなえる高い情報発信能力をもつ政治的アクターであると予想した。具体的には、国家やマスメディア、ツーリズム研究者はもちろん、旅行会社や地方公共団体、NPO 法人関係者などである。その実例として、東浩紀(2013a・2013b)による「福島第一原発観光地化計画」を挙げた。この活動では、チェルノブイリ原発を訪れる旅をダークツーリズムとして紹介している。このような活動は、「ダークツーリストのまなざし」を構築しようとする活動として捉えることが可能である。この活動では、まなざしの構築者である東個人の考えが強く反映されており、「ダークツーリストのまなざし」を構築する政治的アクターが単一である点で、珍しい事例である。本稿で取り扱う軍艦島は世界遺産であるため、地域の歴史や記憶、場所のイメージをめぐるローカルな政治性のみに留まらない多様なスケールの政治的アクターからなる「ダークツーリストのまなざし」の構築者、誘導者によって特定の場所における記憶や展示をめぐる政治的なせめぎ合いが起きていると考えられる。

Ⅲ. 軍艦島におけるダークツーリズム

１．軍艦島問題の概要

長崎港の南西沖 18km に位置する軍艦島=端島とは、南北 480m、東西 160m、高さ 10m の護岸で覆われた周囲 1.2km、最大海抜 48.5m の無人島である。わずか 0.06 ㎢の島であるが、かつて日本初の鉄筋コンクリート製高層アパートが林立し、1959 年には 5,259 人もの人々が暮らし、世界最大の人口密度を誇った島であった。軍艦島が誇る端島炭鉱における石炭産出量は、1890 年の三菱による操業から 1974 年の閉山に至る 84 年間の合計で 1,500 万トンを記録している。この小さな島の中に学校や病院、神社、郵便局、映画館、パチンコ屋、遊郭 [7]といったあらゆる都市機能が詰め込まれ、全てが三菱の影響を強く受けた「単一企業集落」(川崎,1973)であった。

以下に長崎在日朝鮮人の人権を守る会(1982・1983・1984・1986・1991・1994・2011・2014・2016)の史料を参考にして軍艦島における朝鮮人・中国人労働者の負の歴史について述べる。

1930 年代末以降の軍艦島では、戦争の継続を目的とした石炭の増産に迫られ、徴兵による日本人採炭夫の不足を補うために朝鮮人と中国人が働かされていた。1941 年には史上最大の 41.1 万トンを出炭し、大日本帝国の戦争を支える一大拠点となっていた。朝鮮人・中国人炭鉱労働者は劣悪な労働環境の下で働かされ、日本人炭鉱労働者と比べて条件の悪い住居や食事が与えられていた。鉄筋コンクリート製の高層アパートが密集する軍艦島では、上層階ほど住環境や展望に優れるが、一方で下層階にはほとんど日照が入らず、時には波が入り込む有様であった。居住空間の割り振りは、上層階に三菱社員、中層階に日本人正規鉱員、下層階に日本人非正規労働者、最下層に朝鮮人労働者が割り当てられ、中国人労働者には鉄条網 [8]で囲まれた収容寮を与えられていたとされる。住居の高さと島での地位は比例しており、島での居住環境は極めて資本主義的な階層社会を構成していた。そのため、日本人炭鉱労働者よりも朝鮮人・中国人炭鉱労働者の方が死亡率は高かった [9]。終戦まで無事に生き残ることのできた朝鮮人たちはこの島を「監獄島」、「地獄島」と証言している。

現在では、軍艦島の負の歴史とは、「戦時体制下の朝鮮人・中国人の徴用」であると語られることが多い。しかし、非正規労働者として働く日本人労働者にとってもこの島は「監獄島」、「地獄島」であったという指摘もある。上野(1960)はかつて軍艦島で働いていた大分県の農村出身の W 氏に聞き取り調査を実施した。1914 年生まれの W 氏は 1931 年にボッシュウヤという人買い人にそそのかされて軍艦島に連れてこられ、支度金や前借金によって飯場に縛り付けられ、賃金は支払われなかったとされる。そして、コンクリートのリンチ部屋の鉄柱に吊るし上げられ、飯場のオヤジ(納屋頭)にエイガンチョウ(毒針のついた赤エイの長いしっぽ)で追いたてられながら、出水事故の多発する地底の切羽で採炭させられたと証言している。このような事実から、低い雇用身分の労働者にとっては、日本人・朝鮮人・中国人の民族的区分とは関係なく、一様に軍艦島は「地獄島」、「監獄島」であったのではないかと筆者は考える。朝鮮人徴用工の問題は日本型資本主義の暴力性

の上にさらに民族差別が重なった結果、生じた問題なのではないだろうか。軍艦島における日本人の負の歴史は長崎在日朝鮮人の人権を守る会の書籍には記述が見られない。長崎在日朝鮮人の人権を守る会の関係者らが語る軍艦島の負の歴史には、日本人非正規労働者の悲劇が抜け落ちていると言える。

戦後、炭鉱としての軍艦島は、エネルギー革命の影響を受け、「安全に採掘しうる炭量が枯渇して鉱命が尽きた(高島炭礦史,1989)」ため、1974年に閉山し、無人島としてかつての施設や建物は放置され、廃墟となっていた。そして、時を経て90年代にいわゆる「廃墟ブーム[10]」が生じると、無断上陸者の増加に苦慮した三菱は、2001年に当時の高島町に島を無償譲渡し、2005年には高島町が長崎市と合併したため、文化遺産の観光活用経験に優れた長崎市が島を管理することになった。民間の動きとしては、2003年3月に「軍艦島を世界遺産にする会」が発足し、代表である元島民のA氏を中心に少しずつ草の根で軍艦島を世界遺産にしようとする活動が広がっていった。

2009年には、ユネスコ世界遺産暫定リストに「九州・山口の近代化遺産群」の構成資産として軍艦島が記載された。時期を同じくして、長崎市は軍艦島の島内に見学用通路を整備し、安全規定を定めた上で2009年4月22日から一般公開を開始した。

2014年7月には、内閣官房と一般財団法人「産業遺産国民会議」の主催で「産業遺産国際会議」が開催され、名称を「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」へと変更された。この結果、九州・山口というスケールの枠組みが外され、岩手や静岡の近代化遺産を含んだ23もの資産を世界遺産に推薦することが決定された。こうして、元々ローカルスケールから始まったA氏による軍艦島を世界遺産にする活動は、内閣官房が取り仕切る明治日本のサクセスストーリーの喧伝活動へと主導権が奪われていった。そして、2015年7月5日にドイツで開かれていたユネスコ世界遺産委員会において、「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の構成資産として軍艦島は世界遺産に登録された。

世界遺産への登録は、軍艦島単独でなされたわけではなく、軍艦島を含めた23もの遺産からなるシリアルノミネーション[11]「明治日本の産業革命遺産」としてであった。しかし、軍艦島はその構成遺産の中でも視覚的インパクトが強いため、メディアでは「明治日本の産業革命遺産」の象徴的な存在として報じられている。話題を賑わしているのは、世界遺産に登録されている閉山後に水没して立ち入ることのできなくなった端島炭鉱や明治時代に造られた天川工法の護岸ではなく、世界一の高密度人口と言われた島の住民生活を支えた鉄筋コンクリート製高層アパート群が生み出すその外観の特異さと、それらが一斉に崩壊を始めた巨大な廃墟がもたらす非日常的なインパクトである。ツーリズムの対象としての軍艦島には、希少性や象徴性、安全性といった観光資源となるために必要な条件がそろっていた。

軍艦島の世界遺産への登録の過程では、韓国政府がかつて朝鮮半島から連れてこられた人々による「強制労働」があったという理由から、世界遺産の登録に強く反対した[12]。韓国側の強い反発を受けた日本政府は、日韓外相会談を開催し[13]、当時韓国が世界遺産への登録を目指していた「百済の歴史地区」に対する協力を約束することで韓国政府の譲歩を引き出そうとした。しかし結局、両者の主張の溝は埋まらず、「明治日本の産業革命遺産」の登録に際しては、韓国が行う予定の意見陳述の表現をめぐって調整がつかず、世界遺産委員会審議が一日延期された。

この意見陳述の表現で問題とされたのが、韓国政府による「多くの朝鮮半島出身者が自らの意志に反して連れてこられ、働かされた(forced to work)」という文言である。これによって、日本政府が軍艦島における「強制労働」を認めたのかどうかが問題となった。当時の岸田文雄外相は「forced to work という表現は『強制労働』を意味するものではない[14]」と述べている。そもそも、韓国政府が最初に用意していた意見陳述案には「強制労働 forced labour」という表現が使われており、日本が朝鮮人元徴用工による損害賠償請求訴訟を恐れてこれを調整した結果、「働かされた forced to work」という表現に変更されたことが分かっている[15]。このような調整を韓国政府が認めた理由は、日本が「(軍艦島での)犠牲者を記憶にとどめるために適切な措置を説明戦略に盛り込む」

ことを約束したからである。

「明治日本の産業革命遺産」が世界遺産に登録される直前の時期において、韓国政府は激しいロビー活動をユネスコ世界遺産委員会で展開した。ロビー活動では、軍艦島をアウシュヴィッツ強制収容所と比較してなぞらえることで韓国政府の主張の正当性を他国の代表に対して訴えていた[16]。

佐藤地ユネスコ日本大使は世界遺産委員会において、「日本は、1940 年代にいくつかのサイトにおいて、その意思に反して連れてこられ、厳しい環境の下で働かされた多くの朝鮮半島出身者がいたこと、また、第二次世界大戦中に日本政府としても徴用政策を実施していたことについて理解できるような措置を講ずる所存である。日本はインフォメーションセンターの設置など、犠牲者を記憶にとどめるために適切な措置を説明戦略に盛り込む所存である[17]」と約束した。そのため、2017 年 12 月末までにユネスコに対して徴用工の歴史をいかにして説明するのかをまとめた文章を提出することになっていた。

日本政府は 2017 年 11 月 30 日にユネスコに対して 2019 年度をめどに軍艦島を含めた「明治日本の産業革命遺産」のインフォメーションセンターを東京都内に設置する計画を記した報告書を提出した。このインフォメーションセンターでは、労働者の賃金記録などの 1 次史料や元島民の証言などを公開し、朝鮮半島出身の労働者が軍艦島などで働いていたことを含めて様々な情報を発信する方針である[18]。しかし、日本政府はこのインフォメーションセンターにおいて、軍艦島の炭鉱で戦時徴用された朝鮮半島出身者に関して、過酷な強制労働の実態はなかったとする元島民の証言を公開する方向で検討に入った。日本政府が「明治日本の産業革命遺産」の歴史を知らせるという約束に基づいてユネスコに提出した報告書には強制(forced)という表現がまったく出てこない[19]。「第二次世界大戦当時、国家総動員法に基づき、戦前と戦時中、戦後に日本の産業を支援(supported)した多数の朝鮮半島出身者がいた」と書かれている。強制的に徴用され、自由を剥奪された朝鮮人鉱夫について、日本の産業を「支えていた supported」したと表現しているのである。

このような日本の歴史修正主義的な動きに憤慨する韓国の市民団体は、2017 年 8 月 12 日にソウルと仁川[20]、24 日には京都の「丹波マンガン記念館」、12 月 7 日には済州島に「徴用工像」を建て[21]、日韓関係の緊張を示すモニュメントが次々と建てられている。「徴用工像」は軍艦島における朝鮮人元徴用工のみを象徴して建てられているわけではない。しかし、2017 年に 3 体の「徴用工像」が建てられたことは、後述する 2017 年に公開された映画「軍艦島」によって、元徴用工の問題が報道を通して想起される機会が韓国国内において増えたことと関係していると考えられる。「徴用工像」が建てられるたびに軍艦島における負の歴史がメディアを介して日韓両国民に想起され、軍艦島は政治的イデオロギーが錯綜し、せめぎ合う場所として日韓のツーリストに認識されるようになりつつある。

２．映画「軍艦島」における表象

2017 年 7 月 26 日に韓国で公開された映画「軍艦島」とは、戦時中に軍艦島で「強制労働」をさせられていた朝鮮人たちが決死の脱出を試みるリュ・スンワン監督製作のアクション映画である。映画の配給会社は CJ エンターテインメントである。リュ・スンワン監督は映画を製作した動機として、「取材した事実を基にして、当時の朝鮮人強制徴用の悲惨な実態と日本帝国主義の蛮行、そして日帝に寄生した親日派の人倫に反する行為を描こうとした[22]」と述べた。映画公開当日には、韓国行政安全部のキム・ブギョム長官が映画を視聴し、「(韓国)国民が日本による強制動員被害者の痛みと苦しみを理解し、共感する契機になればいい。(韓国)政府は国民の目の高さに合った歴史の清算に最善を尽くす[23]」と述べた。この上映会には、軍艦島で徴用された経験を持つ 90 代男性 2 人が出席し、男性らは舞台あいさつの場で「強制徴用された人々の痛みと苦しみを国民が記憶できるようにしてくれ、心から感謝する[24]」と述べた。さらに、配給会社の CJ エンターテインメントは 2017 年 7 月 28 日にユネスコの本部があるパリでユネスコ韓国政府代表部のイ・ビョンヒョン大使をはじめ、ユネスコ世界遺産委員会の委員国であるタイ

やクウェートの大使らを招待して映画「軍艦島」の上映会を開催した。CJ エンターテインメントは「ユネスコ世界文化遺産に登録された軍艦島の隠された歴史を世界に伝えるため、ユネスコ本部があるパリで今回の行事を行った。軍艦島での強制徴用などを記憶するための措置を求めたユネスコの勧告を日本が履行していないことについて、国際社会の関心を促したかった[25]」と映画の制作と外国の大使を招いた上映会開催の理由を説明した。映画を観賞したイ・ビョンヒョン大使は、「ユネスコ勧告事項の履行を日本側に促すよう努力中だ[26]」と述べ、ユネスコのクウェート大使は「韓日関係を含む国際的素材を扱っており、アラブ圏などグローバル市場でも関心を持つことができる映画だ[27]」と述べた。

このような事実関係が示すのは、映画「軍艦島」の制作が日本政府による軍艦島の強引な世界遺産への登録、ひいては 2012 年 8 月の李明博大統領(当時)による竹島上陸、天皇謝罪要求から長らく続く険悪な日韓関係と強く関連しているということである。以下に映画「軍艦島」の主なストーリーをまとめる。

映画「軍艦島」は Based on a true history(英語字幕)というテロップから始まる。物語は 1945 年 2 月から始まり、オープニングは軍艦島から脱出しようと海を泳ぐ朝鮮人青年 2 人が「軍艦マーチ」を流す監視船に網で捕らえられる場面である。そして、舞台は日本統治下の朝鮮へと移る。日本統治下の京城、クラリネット奏者で楽団を率いる主人公カンオクは、娘のソヒと仲間たちとのジャズ演奏を得意としていた。かねてより日本(内地)での活動を望んでいた彼は、朝鮮人警察官にワイロを贈り、紹介状をもらって、下関へと渡ることになる。同じ船には大勢の朝鮮人が乗り合わせていた。しかし、下関へと着くと、日本軍によって朝鮮人らは輸送列車に詰め込まれ、運ばれる。船に乗せられ、着いた先は軍艦島であった。そこはまさにこの世の「地獄」であった。

カンオクたちが軍艦島に到着すると、彼らの衣服や貴重品はすべて没収される。そして、男性は裸にされて作業着に着替えさせられ、海水を吸った畳の敷かれた最下層のタコ部屋へと放り込まれる。女性も素っ裸にされ、産婦人科で性病検査をさせられ、島内の遊郭へと送られる。主人公の娘、幼いソヒも遊郭に入れられ、三菱幹部のお酒の席の手伝いをさせられる。端島炭鉱所長シマザキダイスケ[28]に気に入られたソヒは、所長の家の使用人となる。カンオクは三菱幹部の機嫌を取り、ソヒを守るためにあらゆる手を尽くす。映画の途中には、回想録として日本軍が慰安婦を釘だらけの板の上でころがし、血だらけにして虐殺するシーンが挿入されている。

以前から軍艦島で働く朝鮮人鉱夫たちの間では、元独立運動家のハクチョルが精神的リーダーであった。そこへ朝鮮独立を目指す組織、大韓民国臨時政府から、工作員のムヨンが送り込まれる。ムヨンはハクチョルと連絡を取るように組織から言われていたが、次第にハクチョルの言動に疑問を感じていく。

映画では、腰すら伸ばせない坑道で体を縮ませたまま採掘作業をする朝鮮人少年、ガス爆発の危険にさらされながら作業する朝鮮人たちの姿が映される。この映画には日本人炭鉱夫は登場しない。そして、日本の敗色が濃くなると、日本人らは軍艦島で朝鮮人に犯した蛮行を隠蔽するために全ての朝鮮人を坑道に閉じ込めて爆破し、虐殺しようと画策する。

「広島に原子爆弾が投下され、日本の敗戦は時間の問題である」

「そうなったら、軍艦島での強制労働の事実が連合国側に明るみになり、日本人関係者は戦争犯罪に問われる」

「そうなる前に、証言者になるかもしれない朝鮮人を全員殺さなければならない」

「この島での出来事を記憶する朝鮮人たちは一人たりとも残してはいけない」

映画の後半では、朝鮮人鉱夫から尊敬されていたハクチョルが実は親日派であったことが判明する。ハクチョルは日本人と交渉する役割を演じながら、裏では朝鮮人鉱夫の賃金や死亡補償金などを横領していた。ハクチョルはその事実を隠蔽するため、全ての朝鮮人を坑道に生き埋めにして虐殺しようとする所長シマザキ、所長代理ヤマダの陰謀に朝鮮人でありながら加担することになる。

しかし、ハクチョルは工作員ムヨンによって公開処刑される。ムヨンは朝鮮人鉱夫たちが集まる中、

「民族の敵と内通し、朝鮮人民の血を売って私利私欲を肥やした罪、指導者になりすまし民衆を欺瞞した罪、反民族的行為を朝鮮の名で処断する」と叫び、ハクチョルの喉を切り裂く。こうしてハクチョルに代わってムヨンが新しいリーダーとなる。ムヨンは武装蜂起を決行して軍艦島から脱出する計画を立てる。そのとき鉱夫たちは皆、ろうそく[29]を持って計画への参加を誓う。軍艦島からの脱出に反対し、日本人との話し合いを望む朝鮮人たちも存在するが、脱出派の朝鮮人たちは「そんなことをされて計画が漏れたらおしまいだ」として彼らを柱に縛りつけてしまう。そして彼らは、日本人による放火に巻き込まれて焼死する。私欲のために日本人と癒着した者であっても、平和的な解決策を求めた者であっても、親日派の朝鮮人たちはみな悲惨な最期を遂げる。

映画のクライマックスは、日本人による朝鮮人虐殺計画を察知した朝鮮人労働者が一斉に武装蜂起し、激しい銃撃戦の果てに船を強奪して逃亡する場面である。米軍の空襲によって動けなくなっていたシマザキを殺害して端島炭鉱所長に事実上なっていたヤマダは、激しい戦闘の結果、ソヒに火炎瓶をぶつけられ、炎上している最中にムヨンによって刀で首を切り落とされる。所長を討ち取ったムヨンは日本人に対して「すべて終わった。これから俺たちは家に帰る」と日本語で叫び、勝利を宣言する。

こうして生き残った朝鮮人たちは石炭運搬船で軍艦島を脱出する。船の上では、被弾して負傷したカンオクが、ムヨンに対して「娘のソヒに好物のそばを食べさせてやってくれ」と頼んで息を引き取る。そのとき長崎に原爆が落とされる。「あそこにも多くの朝鮮人がいたのに」と誰かがつぶやき、船の上から黙って長崎を見詰める彼らの姿で映画は終わる。

そして、字幕が表示され、「軍艦島が 2015 年に世界遺産登録され、朝鮮人への強制的な労務があったことを 2017 年 12 月までにユネスコに報告することが約束されているが、日本で現在それが履行される様子はない」という政治的なテロップが映される。なお、この映画に中国人は 1 人も登場しない。

映画「軍艦島」は公開初日に 97 万人余りの観客を動員し、韓国のオープニング興行記録を塗り替えた[30]。ファン・ジョンミン(カンオク)、ソン・ジュンギ(ムヨン)ら日本でも人気のある俳優が出演しており、豪華なキャスト出演が注目を集めた。2017 年 7 月 26 日に「軍艦島」は韓国の 2168 スクリーンで公開され、初日の観客動員数は 97 万人、2 日目には 150 万人を達成した。これは「軍艦島」が韓国最大の映画会社 CJ エンターテインメントの作品であり、同社系列のシネマコンプレックス CGV が約 1000 スクリーンを確保したためである。2168 スクリーンという数値は韓国全体のスクリーン数の 85%以上を占め、韓国のほぼすべての映画館で「軍艦島」を上映していた[31]。

2017 年 10 月 15 日には、映画「軍艦島」がスペイン第 50 回シッチェス・カタルーニャ国際映画祭コンペティション部門 Orbita セクションで最優秀作品賞を受賞した[32]。そして、2018 年 3 月現在、アメリカ、カナダ、イギリス、オーストラリア、ニュージーランド、フィリピン、インドネシア、シンガポール、マレーシア、タイ、ベトナム、ミャンマー、香港、台湾といった世界中で上映される映画となった[33]。

このような映画における軍艦島の描写に対して、日本の軍艦島元島民らは反論声明を出した。映画は軍艦島を「強制徴用」された朝鮮人らが劣悪な環境で労働を強いられる「地獄島」、「監獄島」として表象しており、元島民らは生まれ育った故郷が貶められているとして反発した。自分の故郷である軍艦島の姿が国内外で歪められることに憤りを感じた元島民たちの一部は、軍艦島の「正しい姿」を後世に伝えるべく「真実の歴史を追求する端島島民の会」を結成し、生まれ育った軍艦島において自らが経験した歴史を記し、映画の内容に反論する声明文を出した。声明文では、「フィクションとさえ断れば、史実と全くかけ離れた虚構を映画にすることは許されるのか」として映画を非難した[34]。声明文は 2017 年 8 月 15 日付で駐日韓国大使と在日本大韓民国民団長に提出された。提出された声明文を要約する。

- ●16 歳未満の朝鮮人少年が炭鉱で働いていた事実はなく、日本人と一緒に学校で机を並べていた。
- ●坑道には送風機が備えつけられ、水飲み場もあったため、少なくとも灼熱の地獄などではなかった。
- ●多くの朝鮮人が殺されたということはなかった。

●終戦後、朝鮮人たちは三菱の船で半島まで無事に送り届けられている。

「真実の歴史を追求する端島島民の会」会長は取材に対して以下のように答えた。

「映画や出版物などで事実と違うイメージが世界に広がることを心配している。真実の端島の姿を知ってほしい[35]」

映画「軍艦島」は歴史認識をめぐる日韓の攻防が続く中で、創り出された創作物である。現在は韓国国内を中心にして軍艦島のイメージに強い影響を及ぼしている。そして映画が国際的に広まるにつれて、その影響力は高まりつつある。今後、軍艦島という場所の意味とそのイメージは、映画の影響を強く受けざるを得ない。この映画が軍艦島に訪れる韓国人ツーリストに対して「ダークツーリストのまなざし」を構築するメディアとして機能していると筆者は考えた。映画の描写によって軍艦島は「悼むべき価値があるダークネス」として韓国人ツーリストを中心に日本国外で認識され、軍艦島をダークツーリズムの対象として創りあげていると考えられる。

３．軍艦島ツーリストのまなざし

映画「軍艦島」の公開以降、軍艦島上陸ツアーに参加する外国人ツーリストの数が増加傾向にあると言われる。しかし、外国人のみを対象とした統計は存在しないため具体的な数値はない。代わりに国際的な旅行情報サイト TripAdvisor における軍艦島の投稿レビューを以下に示す。

第 3 表　TripAdvisor における軍艦島の評価

	軍艦島	Hashima	하시마섬	军舰岛
Excellent	432 59.7%	68 46.9%	30 37.5%	26 46.4%
Very good	226 31.2%	56 38.6%	34 42.5%	23 41.1%
Average	52 7.2%	10 6.9%	9 11.2%	5 8.9%
Poor	8 1.1%	6 4.1%	4 5%	0 0%
Terrible	6 0.8%	5 3.5%	3 3.8%	2 3.6%
Total	724	145	80	56

出典) https://www.tripadvisor.jp/Attraction_Review-g298568-d1384788-Reviews-Hashima_Island-Nagasaki_Nagasaki_Prefecture_Kyushu_Okinawa.html

2018年3月時点のTripAdvisorにおける評価では、日本語使用者と比べて海外から訪れたツーリストによる評価が厳しく、Poor・Terrible の悪い評価を下したツーリストの割合は、日本語使用者が 1.9%であるのに対して、英語使用者は 7.6%、韓国語使用者は 8.8%、中国語使用者は 3.6%となっている。外国人ツーリストにとって、現状の軍艦島ツーリズムは日本人と同等の高い満足度を得られるツアーとはなっていないことが伺える。

次に、筆者が現地でおこなった軍艦島ツーリストに対する聞き取り調査について述べる。筆者は 2017 年 11 月に長崎港の常盤桟橋を集合場所としている X 社と Y 社を利用するツーリスト 120 人に対して、午前と午後の便の出港前と帰港後の時間帯に聞き取り調査を実施した。まず量的データから述べる。

聞き取り調査のツーリストの性別は 120 人のうち、67 人が男性、53 人が女性であった。ツーリストの年齢層は、30 代未満が 37 人、30 代・40 代が 34 人、50 代以上が 49 人であった。性別や年齢による利用する船会社の選択に特異な傾向はみられなかった。筆者の言語能力の制約のため、日本語でのコミュニケーションが可能な外国人ツーリストに絞って聞き取りを実施した。120 人のうち外国人ツーリストは 18 人で、そのうち韓国人が 10 人、中国人が 5 人であった。海外から訪れたこの 18 人は全員が Y 社[36]の上陸ツアーを利用していた。

第 4 表 日本人ツーリスト 102 人の居住地

北海道	東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州沖縄
1	1	38	14	16	9	4	19

(2017 年 11 月のフィールドワーク調査による)

日本人ツーリスト 102 人に対しては、出発地の都道府県についての聞き取りを実施した。102 人のうち、38 人が関東地方で、19 人が九州、16 人が近畿地方、14 人が中部地方、9 人が中国地方、4 人が四国から訪れており、北海道や東北地方からのツーリストは 1 人ずつしか確認することができなかった。

次に、聞き取りで得られた質的データを分析する。筆者は軍艦島への出港前のツーリストに対して、「軍

艦島を訪れようとした動機」、帰港後のツーリストに対して、「訪れた結果どのような感想を軍艦島に抱いたのか」を尋ねる聞き取り調査を実施した。120 人のツーリストのうち、その内訳は出港前のツーリストが 40 人、帰港後のツーリストが 80 人である。聞き取りの結果、得られた動機と感想を分類し、下記に整理する。まず、ツーリストが軍艦島を訪れようと考えた主な動機を以下に整理する。

①世界文化遺産であるから

②軍艦島の景観に惹かれたから

③廃墟に行ってみたかったから

④映画「軍艦島」の舞台を訪ねてみたかったから

(④は韓国人ツーリストのみ)

このような動機が代表的であった。「軍艦島の景観に惹かれたから」と「廃墟に行ってみたかったから」という動機は似通った内容であるが、前者は軍艦島を世界でここにしかない固有の場所として捉えているのに対して、後者は軍艦島を人間の生活がなくなった廃墟の普遍的なモデルの一つとして捉えていた。筆者は「日本の近代化の歴史を訪ねたかったから」、「日本の産業革命の歴史を知りたかったから」という動機のツーリストの存在を予想していたが、1 人も確認することはできなかった。軍艦島におけるツアーガイドの解説では、日本の近代化における軍艦島の貢献について多くの時間を使って語っているが、訪れる動機として近代化を挙げるツーリストは珍しい存在だと推測される。そして、日本人ツーリストの中で軍艦島のダークネス、負の歴史が来訪の動機として機能している者は存在しなかった。

出港前の 40 人のうち、軍艦島の負の歴史を認識していたのは韓国人ツーリストを含めて 8 人であった。しかし、負の歴史を認識しているからといって、それが来訪の動機と必ずしも結びついているわけではなかった。「映画の舞台を訪れてみたかったから」に代表される韓国人ツーリストの動機は、負の歴史そのものが来訪のきっかけとなっていた。しかし日本人ツーリストの場合は、負の歴史を認識していても、その事実判断をひとまず保留にしていることが多く、訪れる動機とはなっていないことが分かった。その典型的な例を以下に記す。

B 氏「軍艦島に行こうと思ったわけは、やはりその見た目です。世界遺産登録より前に、高校生のときからずっといつか行ってみたいなと思っていました。別に歴史に詳しいわけではないので、なぜ世界遺産になったのかを把握しているわけではありませんが、観光客を惹きつける魅力があの島にはあります。今の長崎県で一番の観光スポットでしょう。・・中略・・戦前のことですが、朝鮮半島の人々が軍艦島で無理やり働かされたみたいな話を一応、聞いたことはあります。ただ、私には真実が分からないため、何とも言い難いところです。」

B 氏の発言によると、B 氏はかつて軍艦島の負の歴史に触れたことがあるが、その判断をひとまず保留にしており、軍艦島の景観に惹かれて訪れていることが分かる。やはり日本人ツーリストにとっては、自身が加害者となりかねない負の歴史、「(日本人が加害者となる)ダークネス」が観光資源として機能することは難しいと考えられる。他にも、態度を保留にしている日本人ツーリストの中には、負の遺産という言葉に対して強い反発を示す者も存在した。

C 氏「負の遺産だとは思いません。そもそも過去の歴史を正と負で判断すること自体、おかしいと思います。韓国人や中国人の強制連行、強制徴用の問題の真偽は私には手に負えないためともかくとして、日本人が過去に軍艦島で強制労働のような働き方をさせられていたとしても、それは苦しい仕事があったというだけで、現在の感覚から過去を決めつけることはできないと思います。現在の価値観で過去を裁いて何になるというのですか。例えば、封建制度だって今の価値観では考えられない制度でしたが、当時は必要な社会秩序でした。過去の事件の是非を論じるのであれば、当時の社会情勢に身を置いて考える必要があると思います。」

C 氏の発言は、「現在の価値観で過去を論じるべからず」という保守論壇に典型的にみられる意見である。「その時代にはその時代の常識があった」という言説は、過去に起こったことはその過去においてはどうしようもなかったのだという結論しかもたらさず、「歴史から人間は何も学ぶことができない」という不毛な結論につながりかねないと筆者は考える。

過去の価値観をその時代に特有のものとして認識できるのは、現在の価値観を基準にしてその時代を考えることができているからである。時代ごとに叙述がなされる歴史は、歴史家が生きているその時代の価値観に基づいて書き換えられていくものであり、「人の命が地球より重い」時代もあれば、「人の命が地球より軽い」時代がある。負の歴史をまなざすという行為は、対象とする時代に特有の価値観で見るということではなく、対象とする時代に生きていた人々の眼には何がどのように映っていたのかを探ると同時に、その時代の人々には何が見えていなかったのかを知ることだと筆者は考える。対象とする時代に特有のまなざしで歴史をみたところで、負の歴史を反省的にまなざすことができるとは到底考えられない。その意味において「ダークツーリストのまなざし」とは、現在の価値観から過去を反省的に捉え直す態度なくして存在することはできないまなざしである。負の歴史に対して態度を保留にしているツーリストがダークツーリストになることは極めて困難であると考えられる。

出港前のツーリストの中には、韓国人ツーリストや中国人ツーリストの姿も見られた。韓国人ツーリストの場合は、映画「軍艦島」を見たことが実際に軍艦島を訪れる動機となっていたことが聞き取りの結果分かった。しかし中国人ツーリストの場合は、映画の存在どころか、軍艦島でかつて中国人が働かされていたという基本的事実を認識していない者が多いことが分かった。

D 氏「軍艦島は異様で珍しい廃墟が楽しめる面白い観光スポットだと聞いて、ツアーに参加しました。中国人が昔この島で働かされていたなんて情報は聞いたことがありません。本当なのですか。ツアーガイドの方もそのようなことは一切話していませんし、中国の旅行会社でもそのような話は聞いたことがありません。なので何とも言えません。」

D 氏は上海から来た若者であり、パッケージツアーに参加して軍艦島に訪れていた。D 氏から詳しく話を伺った結果、大多数の中国人が軍艦島を珍しい廃墟や景観を楽しめる世界遺産としてしか認識しておらず、負の歴史を知っている中国人ツーリストはほとんどいないということが分かった。戦時中に中国人が「実質的拉致」同然のやり方で軍艦島に連れてこられ、朝鮮人よりもひどい待遇で働かされていたというのが長崎在日朝鮮人の人権を守る会が主張する史実である。しかし中国人ツーリストの大半はその事実を知らずに軍艦島を訪れていることが分かった。先述した TripAdvisor の結果にもその傾向は現れている。映画「軍艦島」に中国人が登場しないことに象徴的であるが、軍艦島の負の歴史に対する認知度は韓国人ツーリストと中国人ツーリストで大きく異なっていることが分かった。40 人のツーリストの軍艦島を訪れる主な動機の比率を以下に示す。

第 5 表　出港前の軍艦島ツーリスト 40 人の主な動機の比率

動機	景観	廃墟	世界遺産	映画	他
人数	15 人	11 人	9 人	4 人	1 人
比率	38%	28%	22%	10%	2%

(2017 年 11 月のフィールドワーク調査による)

次に、帰港後のツーリスト 80 人に対する聞き取り調査の結果を示す。帰港後のツーリストが軍艦島に抱いた主な感想を以下に分類する。

第 6 表　帰港後の軍艦島ツーリスト 80 人の主な感想の比率

感想・意見	人数	比率
近現代史・産業革命	21 人	26%
軍艦島での生活実態	13 人	16%
軍艦島での労働実態	11 人	14%
世界遺産としての意義	7 人	9%
ガイドツアーへの不満	7 人	9%
その他	21 人	26%

(2017 年 11 月のフィールドワーク調査による)

①日本の近現代史・産業革命が分かった
②軍艦島での当時の生活実態が分かった
③軍艦島での当時の炭鉱労働の実態が分かった
④後世に残していきたい世界遺産だと思った
⑤ガイドツアーに対する不満

出港前の動機と帰港後の感想を比較すると、出港前は動機として廃墟や景観を挙げるツーリストが多かったが、帰港後のツーリストが廃墟や景観についての感想述べる事例は少なかった。X 社でガイドツアーを務める軍艦島元島民の A 氏は、上陸ツアーの

中でツーリストに対して、「かつてそこで暮らしていた人間にとっては、いくら崩壊寸前であろうとも、やはりそこは紛れもない故郷なんです。それを軍艦島イコール廃墟では悲しすぎる。この島はただの廃墟じゃないんです。」「端島、軍艦島は自分にとって思い出のふるさと、かけがえのない島なんです。」と語っていた。そのため、元島民のガイドが抱く場所(故郷)への愛着がツーリストに影響したのだと考えられる。元島民が務めることの多いツアーガイドは、現在の軍艦島を廃墟として語ることに否定的であり、自身の故郷である以上、廃墟としてではない価値をこの島に求めている。ガイドの語りからそのような想いをくみ取ったツーリストが軍艦島の廃墟や景観としての側面を評価することに躊躇するようになるのはごく自然な反応だと考えられる。

筆者は、この感想の中でダークツーリズムにつながるであろうツーリストの感想は、「日本の近現代史・産業革命が分かった」と「軍艦島での炭鉱労働の実態が分かった」の二種類であると考えた。しかし、歴史の光と影のどちらに焦点を当てて感想を述べているのかでその意味合いは大きく変わる。軍艦島を明治日本の産業革命の土台となったサクセスストーリーの場としてのみ認識しているのであれば、ダークツーリズムではないからである。聞き取り調査の結果、歴史の光の部分のみを受容しているツーリストがある程度の人数存在していた。代表的な感想を以下に記す。

E 氏「あの島には栄枯盛衰を感じましたが、悲惨な感じはしませんでした。それは日本の発展を支えてくれた活気ある歴史のおかげだと思いました。」

F 氏「廃墟なのでなにか恐ろしげな物を想像しがちですが、軍艦島にはそういう感じはなく、悲惨な歴史がないからこそ観光地として純粋に楽しむことができるのかもしれません。」

G 氏「炭鉱で働くイコール強制労働のイメージがあり、勝手に暗い雰囲気だと思い込んでいましたが、ガイドさんの解説を聞いて、実際のところはかなり高給で、裕福な生活をされていたことが分かり、印象が変わりました。」

H 氏「日本の高度成長を支えてきた陰に人々の労働があったこと、そして時間の流れとともにこのような姿を晒していることに感動しかありません。迫力満点で、日本の戦後復興を支えてきた日本人の団結力、我慢強さ、優秀さを感じました。」

上記したツーリストの感想は、軍艦島の負の歴史を認識していないツーリストによるものである。G 氏や H 氏はあくまで戦後の軍艦島に対する感想を述べており、戦後の炭鉱夫が高給取りであったことや狭い居住区故の団結力があったことは事実である(井上,2010)。しかしそれは「83 年間の端島の歴史」の中で一番光り輝いていた戦後の 1945 年から 1974 年の閉山までの 29 年間に限った話である。

一方で、歴史の影部分、軍艦島のダークネスに対して関心を示したツーリストも存在した。以下に記すツーリストの感想は、加害者や被害者といった日本人の立場に関係なく、負の歴史に対する関心がみられるものである。

I 氏「海底炭鉱へ向かうための朽ちかけた階段が残っており、過酷な労働へ駆り出された男たちの哀愁を感じました。」

J 氏「軍艦島の生活がいかに大変であったかを痛感させられました。時代のために頑張った人々とその歴史、その人たちへの冷遇を語るというガイドさんの解説に驚きました。このような悲しい歴史があったなんて知りませんでした。」

K 氏「廃墟都市としての魅力は十分にあるのですが、過酷な労働をしてきた炭鉱夫たちを考えると物悲しい気持ちにもなりました。」

L 氏「当時の端島の生活水準は高く、人気の家電がいち早く普及したことや狭いうえに人が多すぎてプライバシーの確保が難しかったこと、過酷な炭鉱での労働の実態など実際に体験した人にしかわからない話を聞けてよかったです。」

M 氏「暮らしは豊かだったようですが、人口密度が高いあの島で人間関係やらなにやらいろいろと語られない部分もたくさんあったかと思うと、もの悲しい気分になりました。光と影が両方あったのでしょうね。」

N 氏「ガイドによって軍艦島の説明が異なるみたいですが、日本人だけではなく、東アジアの人々が暮らしていた歴史があり、色々な意味で、歴史に翻弄された場所だなと感じました。」

O 氏「ただの廃墟ではなく人間が住んでいた場所であり、多くの男たちが命の危険と隣り合わせで働いていたことが分かりました。実際に炭鉱内で亡くなった人の話を聞き、生

半可な気持ちで来るべき所ではなかったと後悔しました。」

P 氏「あの島は世界一の人口密度と最新の技術があった反面、炭鉱での重労働など暗い側面もあり、繁栄とその後の無常がなんとも言えず感慨深い場所でした。」

上記したツーリストの感想は、軍艦島の負の歴史に対する関心を示したツーリストによるものである。このようなツーリストはダークツーリストとなりうる可能性を十分もった存在だと考えられる。軍艦島に関する事前学習や記憶の展示の在り方次第でダークツーリストとなることができると筆者は考える。日本人ツーリストにとって現状の軍艦島ツーリズムは、負の歴史に動機づけられたダークツーリストによるダークツーリズムとはなっていない。しかし、ガイドによる解説の結果、ダークツーリズムに近い状態のものが行われていると言っても過言ではない。

軍艦島におけるダークネスには、「(日本人が加害者となる)ダークネス」と「(日本人が被害者となる)ダークネス」の二種類が存在している。しかし海外からのツーリストの増加に伴って、「(日本人が加害者となる)ダークネス」も少しずつ語られやすい状況になりつつあると考えられる。そして、海外からのツーリストの中で、負の歴史に動機づけられたダークツーリストはやはり韓国からのツーリストであった。韓国人ツーリストによる感想はその大半が現状のツアーに対する不満を述べるものであった

Q 氏「日本人にとって都合が良い面だけが説明され違和感しかありませんでした。もっと過去の事実を正しく伝えてほしいと思います。」

R 氏「映画を見て、興味を持ったためここに来ました。映画にはフィクションが多く、脚色が入っているとは思いますが、ガイドによる説明には日本人のことばかり語られていたため残念でした。」

S 氏「軍艦島の輝かしい歴史ばかりが説明され、影の部分である強制連行のことは一切語られませんでした。朝鮮人や中国人がかつて端島にいたという事実だけが伝えられ、負の歴史を一応伝えたつもりではいるのでしょうが、とんでもない話です。」

その他、日本人ツーリストによるツアーに対する不満として、以下に示す感想がみられた。

T 氏「廃墟好きの人たちが『イエーイ』なんて叫びながら写真を撮っていましたが、ガイドさんの説明を聞き、いかに辛い採掘作業だったかというお話を聞くと、場の空気にそぐわないなと感じました。不愉快でした。」

U 氏「かつての炭鉱での仕事は本当に大変だったのでしょうが、昔の愚痴ばかりをこぼすガイドの解説のせいで気分が萎えました。軍艦島に思い入れがあるのは分かりますが、それを観光客にまで押し付けようとされても困ります。」

この 2 人の不満は同一のツーリズム空間において「ロマン主義的まなざし」と「集合的まなざし」を持ったツーリストが居合わせた結果、生じた感情的対立であると考えられる。この両者の対立は今後のダークツーリズム研究においてより深い考察が求められる現象であると筆者は考える。何故なら、光と影の両側面を持った近代化遺産においてダークツーリズムが実践される場合、その場所にダークツーリストのみが訪れるなどということはありえないからである。ダークネスを求めるダークツーリストもいれば、従来型の「光を観るために訪れた観光客」も存在している。両者は同じツーリズム空間で過ごすことになるため、ガイドの語る「人間の苦痛」に対する反応は様々なものになって当然である。近代化遺産を訪れるツーリストは多様な存在であり、近代化遺産におけるダークツーリズムとは、ダークネス一辺倒なものではなく、歴史をめぐる光と影が錯綜したものとなる。現状の軍艦島ツアーでは、日韓という民族的な区分のみならず、「ロマン主義的まなざし」と「集合的まなざし」という点でもツーリストが二極化していることが確認された。Urry(1995)は、観光地には「ロマン主義的まなざし」を必要とする観光地と「集合的まなざし」を必要とする観光地があると主張していた。しかし、光と影が交差する近代化遺産におけるダークツーリズムの場合は、両方のまなざしを持ったツーリストが訪れて当然であるため、多様なツーリストを満足させることができ、不満をかきたてることのないガイドの語りが求められていると筆者は考える。

海外から軍艦島を訪れるツーリストの大半は韓国人と中国人であった。この両者の間には軍艦島の負の歴史に対する感度に大きな違いが見られた。中国人ツーリストの場合は、軍艦島に日本人ツーリスト

とそれほど変わらない動機で訪れており、パッケージツアーに組み込まれているため上陸したというツーリストが多いように見受けられた。中国人ツーリストは鉄条網で囲まれた収容寮があったとされる建物の前で戦前・戦時下における中国人の労働について中国語で説明された後も、感傷的になることはなく、笑顔でその建物を背景に集団で自撮りをしていた。映画「軍艦島」が中国で上映されていないという事情があるとはいえ、軍艦島の負の歴史に対する中国人ツーリストの関心は低いと言わざるを得ない。中国人ツーリストのまなざしは、その意味で「集合的まなざし」であった。一方で、韓国人ツーリストの場合は、映画に動機付けられて軍艦島を訪れており、追悼と歴史学習を目的とした「ロマン主義的まなざし」をもつダークツーリストであった。彼らの多くは現状の軍艦島ツアーに満足しておらず、日本人による朝鮮人に対する加害の歴史が隠蔽されていると憤るツーリストが大半であった。

今回の聞き取り調査では、現状の軍艦島上陸ツアーにおけるガイドの語りに満足している韓国人ツーリストの姿を見つけることはなかった。むしろ、映画「軍艦島」に動機づけられた韓国人ツーリストにとって、ガイドによる解説は満足のいくものではなかった。軍艦島を訪れる韓国人ツーリストの多くはダークツーリストである。しかし、現状の軍艦島ツーリズムは彼らの求める「(日本人が加害者となる)ダークネス」を十分に提供することができていない。

Y 社が経営する軍艦島の歴史展示施設、軍艦島デジタルミュージアムに置かれた自由記入帳にはハングルで書かれた怒りのメッセージが確認された。おそらく韓国人ツーリストによるものだと予想される。メッセージの内容を日本語訳にして以下に示す。

2017 年 2 月 9 日

「(この施設では)世界遺産に登録された軍艦島の光の部分だけが展示され、影の部分である強制労働については一切触れられてはいない。何故、昔の韓国人らが人権を保障されずに、寂しく耐え難い生活をしなければならなかったのか。極めて残念である。長崎に特別なことが求められているわけではない。ただ認めて謝罪してほしい。一刻も早く真実が究明されることを願う。」

2017 年 8 月 1 日

「この施設を訪れる韓国人は皆、同じ心であろう。歴史を忘れた国に希望はない。真実はいつか明かされる。良心を持つ日本人たちに訴える。あなた方の先祖が犯した蛮行を直視しなさい。映画『軍艦島』で描かれている内容が真実ではないからと思って安心してはならない。あなた方は近代化のために、何の罪もなく軍艦島に連れてこられて地獄のような生活をさせられた韓国人に謝らなければならない。正しい歴史認識を持たずにただ近代化を喜んでいる自分たちの姿が恥ずかしくないのか？強固に積み上げられたコンクリート住宅の最下層、深い地底において血と汗と涙を流した強制労働者たちの苦痛の上に日本の近代化は成し遂げられたのだ。」

2017 年 8 月 9 日

「日本は強制労働の歴史を認め、謝罪せよ！軍艦島での朝鮮人強制労働の歴史を歪曲するな！苦痛の中で死んでいった朝鮮人労働者たちを哀悼せよ！」

Ⅳ. 結論

１．総括

本稿では、フィールドワーク調査を基にして世界遺産への登録以降の軍艦島ツーリズムにおける「まなざし」の構築と今後の軍艦島におけるダークツーリズムの可能性について論じた。軍艦島元島民の一部は、「自分の故郷を廃墟や東洋のアウシュヴィッツなどと呼ばれたくない」と主張してした。そのため、現在の軍艦島は元島民による故郷としての「場所への愛着」と朝鮮人元徴用工による虐げられた呻き声としての「場所への憎悪」がせめぎ合う意味が争われるアリーナとなった。

2015 年 7 月 5 日に「明治日本の産業革命遺産」の構成資産として軍艦島は世界遺産に登録された。日本政府による「明治日本の産業革命遺産」の世界遺産への登録は、官邸主導の強引なやり方で進められた。その過程において A 氏を中心としたローカルな組織「軍艦島を世界遺産にする会」から始まった軍艦島を世界遺産にする運動は、内閣官房が取り仕切る明治日本のサクセスストーリーの喧伝活動へと変化していった。登録の過程において「強制徴用」、「強制労働」をめぐって「forced labour」と「forced to work」

という表現が問題とされた。しかし、日本政府はひとまずは誠意のある態度を示すことで軍艦島を世界遺産へと登録することに成功した。しかしながら、2017 年 11 月にユネスコに提出した報告書では「supported」と表記した。日本政府による歴史修正主義的な態度に憤慨する韓国の市民団体は今後も軍艦島で徴用された朝鮮人炭鉱労働者を象徴する「徴用工像」を建て続けていくと考えられる。

軍艦島のダークネスをめぐるポリティクスでは、「遊郭」や「鉄条網」の有無をはじめとした政治的立場によって表象されるものと表象されないものが存在した。軍艦島を故郷とする元島民の立場からすれば、映画「軍艦島」は自らの故郷を侮辱する内容でしかなく、到底許容できるものではなかった。日韓共に歴史認識を一歩も譲ろうとしないため、過剰反応と相互不信が掻き立てられている。その結果、軍艦島は歴史認識をめぐる被害者側と加害者側による場所の意味が争われる絶え間ない攻防の激戦地となってしまった。

軍艦島においてダークツーリズムが成立するためには、事前に「ダークツーリストのまなざし」がツーリストの中で形成されていなければならない。しかし、事前に軍艦島の負の歴史に触れることのなかったツーリストであっても、ガイドによる解説の内容次第でツーリストではなく、ダークツーリストとなり得る可能性があると筆者は考えた。今後、映画「軍艦島」のグローバルな上映と日本政府による歴史修正主義的な動きの結果、軍艦島を訪れる海外からのダークツーリストが増加した場合、彼らを商業的に取り込むために負の歴史の伝え方が変わり、ダークツーリズムが軍艦島においてより一般的なものとなる可能性がある。

軍艦島には、「(日本人が被害者となる)ダークネス」と「(日本人が加害者となる)ダークネス」の二種類が存在した。ガイドの解説によって、炭坑労働の苦しみが語られ、「(日本人が被害者となる)ダークネス」が伝えられることはあるが、「(日本人が加害者となる)ダークネス」が語られることは少ない。

軍艦島ツーリストに対する聞き取り調査の結果、現状の軍艦島ツーリズムでは、日本人ツーリストと中国人ツーリストは廃墟とその独特の景観をを非日常なもの、ノスタルジックなものとしてまなざすことに楽しみを見出していた。そして、韓国人ツーリストにとっては映画の舞台に訪れること自体が楽しみの期待される非日常的行為として機能していた。海外から軍艦島を訪れるツーリストの大半は韓国人と中国人であったが、この両者の間には軍艦島の負の歴史に対する感度に大きな違いが見られた。韓国人ツーリストは軍艦島の負の歴史をあらかじめ知ってから個人で訪れているのに対して、大半の中国人ツーリストは軍艦島の負の歴史を知ることなく団体で訪れていた。そして、多くのツーリストが軍艦島に求めていたのは、世界遺産に登録されている閉山後に水没して立ち入ることのできなくなった端島炭鉱や明治時代に造られた天川工法の護岸ではなく、世界一の高密度人口と言われた島の住民生活を支えた鉄筋コンクリート製高層アパート群が生み出すその外観の特異さと、それらが一斉に風化崩壊を始めた巨大な廃墟がもたらす非日常的なインパクトであった。ツーリズム資源として軍艦島をみると、その来訪動機は、廃墟や独特な景観に集中していたが、実際に軍艦島を訪れた後にツーリストが抱いた感想では、軍艦島の近現代史や島での労働や生活の実態が多く挙げられており、このような感想は軍艦島で育ったガイドによる「軍艦島は廃墟ではない」という想いが強く反映された結果だと考えられる。

「ツーリストのまなざし」という観点では、日本人ツーリストの「まなざし」はメディアによって「明治日本の産業革命遺産」における「廃墟の王様」として軍艦島の景観が報道されることで構築されていた。そして、韓国人ツーリストに対して「ダークツーリストのまなざし」を構築していたのはやはり映画「軍艦島」であることが聞き取りの結果分かった。

筆者は、軍艦島における負の歴史問題の原因の一つとして「故郷を東洋のアウシュヴィッツにされたくない」という元島民の想いがあるのではないかと考えた。昨今では、日本政府による戦前・戦時下の軍艦島における朝鮮人や中国人の労働の否定や隠蔽が行われている。しかし、この歴史修正主義的な動きは韓国政府による「軍艦島=東洋のアウシュヴィ

ッツ」論を否定したいがための過剰反応なのではないか。韓国政府としては日本政府に対して戦前の「悪事」を指摘し続けることで政治的に優位な立場に立ち、政権への支持基盤を固めたいという思惑があると考えられる。しかし、「軍艦島=東洋のアウシュヴィッツ」論には無理がある。この両者が折り合える妥協点として軍艦島におけるダークツーリズムは考慮される必要があると筆者は考える。

ダークツーリズム概念の提唱者である Foley＆Lennon (2000)は、ダークツーリズムを支える社会的欲望として、「大きな物語」への懐疑、モダニティの揺らぎを実感したいというツーリストの欲望を挙げていた。しかし筆者は、ダークツーリズムを支える社会的欲望として、負の歴史を疑似体験したいという需要があるのではないかと考える。市野澤(2016)が指摘した通り、ダークツーリストは他者の苦痛や悲劇の物語に対して、ある種の楽しみを見出す存在である。負の歴史を疑似体験したいという欲求は、人前で動機として語ることが憚られる傾向にあると推測される。しかし筆者は過去の人間の苦痛には消費される「快楽としてのダークネス」というある種の商品価値を有していると考える。かつて観光社会学者 Boorstin (1962)は、「観光客の欲求は、彼自身の頭のなかにあるイメージが確かめられた時、最も満足する」ことを指摘した。筆者は軍艦島ツーリズムにおいても同様の現象が生じていると考える。日本人ツーリストの場合は、メディアにおいて「廃墟の聖地」、「異様な景観がもたらす非日常的な場所」として軍艦島が報道されることで「ツーリストのまなざし」が構築され、それが動機となって日本人ツーリストは軍艦島を訪れていた。このような行為はメディアによって増幅された場所のイメージを現地に訪れることで消費し、満足する行為として捉えることができる。同様に韓国人ツーリストの場合は、映画「軍艦島」による「地獄島」、「東洋のアウシュヴィッツ」といった表象が「ダークツーリストのまなざし」を構築しており、構築された軍艦島のイメージを確かめ、負の歴史を疑似体験することを目的として韓国人ツーリストは軍艦島を訪れていた。しかし、元島民のツアーガイドによって伝達される解説内容と映画によって構築された軍艦島の場所イメージがかみ合わないため、大半の韓国人ツーリストは軍艦島上陸ツアーを満足することができていなかった。何故なら、韓国人ツーリストが求める軍艦島の「本物らしさ」、つまりダークネス、負の歴史がほとんど提供されなかったためである。

日本政府の歴史修正主義的な態度に憤慨する韓国の市民団体は、今後も軍艦島の歴史問題と対応する形で「徴用工像」を建て続けていくと考えられる。「徴用工像」が建てられるたびに軍艦島における負の歴史がメディアを介して日韓両国民に想起され、軍艦島は政治的イデオロギーが錯綜し、せめぎ合う場所としてツーリストに認識される。現在の軍艦島は元島民による故郷としての「場所への愛着」と朝鮮人元徴用工、「端島生存者」による虐げられた呻き声としての「場所への憎悪」がせめぎ合う意味が争われるアリーナへと変貌したのである。

２．残された課題

本稿において残された課題は以下の 2 点であると考える。1 点目は、本稿で聞き取り調査をすることができたツーリストは、筆者の言語能力上の制約のため、日本人、韓国人、中国人に偏っており、その他の国のツーリストを対象とすることができていない。そして、韓国人や中国人についても統計的に差異や傾向が見出せる程のサンプル数を取ることができていない。日本の近代化の光と影に巻き込まれていった存在である韓国人や中国人のみならず、他者として歴史をまなざすことができる遠方の国々のツーリストについても調査をするべきである。ポジショナリティの影響を受けにくい日常から空間的にも時間的にも隔絶された非日常の場の方がダークツーリストは素直に歴史をまなざすことができると考えられるからである。

2 点目は、本稿は軍艦島上陸ツアーを実施している 5 社の内、軍艦島元島民がメインガイドを努める 2 社を利用したツーリストを分析の対象としており、元島民ではない人々がガイドを努めている 3 社を利用したツーリストに対する考察をしていない。元島民ガイドによる島の語りが「場所(故郷)への愛着」を

示す傾向にあるのに対して、元島民ではない人々による島の語りは愛着とは別の感情であると推測される。軍艦島ツーリズムを論じるに際して、元島民ではないガイドの解説を聞いたツーリストに対する考察も求められている。

３．今後の研究の展望

日本国内におけるダークツーリズム研究は、まだ端緒を開いたばかりである。そのため、ヒロシマやナガサキに関する事例研究ですら、十分にされているとは言い難い。軍艦島のみならず、ダークツーリズム研究は現地におけるローカルなダークネスをめぐる対立と無関係ではいられないため、研究者はその争いに自動的に巻き込まれることになる。軍艦島のポリティクスでは、「遊郭」や「鉄条網」の記述の有無が示す通り、表象されるものと表象されないものが存在していた。研究者がどちらの情報を信用し、参照して記述するかどうかを迫られるという点で自動的にダークネスをめぐるポリティクスに巻き込まれることになる。さらに、聞き取り調査では、所謂右派と左派で筆者の調査に対する認識や態度に大きな差異が見られた。左派に属する人々は筆者の調査に対して好意的であり、研究材料として積極的に情報を提供してくれたのに対して、右派に属する人々の場合は、聞き取り調査に対して懐疑的であり、不審がる様子が見られた。事例研究が進展しにくい要因はこのような扱いづらさにある。筆者がフィールドワークをする中で顕著だったのは、観光産業に携わる人々に対して、ダークツーリズムという言葉を出しただけで怪訝な顔をされることであった。しかしながら、ダークツーリズムという用語に付き纏うネガティブなイメージは、研究者が社会や地域住民に対して啓発活動を行い、正していくべき問題である。ダークツーリズムを世間に認知させることは、今後の研究上の課題である。

付記

本稿は、2018 年 1 月に神戸大学大学院人間発達環境学研究科に提出した修士論文に大幅な修正を加えたものである。本稿を作成するにあたって調査に協力していただいた方々に心より感謝いたします。また、本稿を執筆するに際してご指導いただいた神戸大学大学院人間発達環境学研究科の澤宗則教授に厚く御礼申し上げます。

注

1)負の遺産とは、歴史上の人類の苦痛や悲劇と関わった遺産を指す。世界遺産の中では、奴隷貿易の拠点であったゴレ島や政治犯収容所のあったロベン島などが著名である。

2)Memorial and Museum Auschwitz-Birkenau News (http://auschwitz.org/en/museum/news/2-1-million-visitors-at-the-memorial-in-2017,1292.html) による。

3)正式名称は端島である。元島民や長崎市民は軍艦島ではなく、端島と表現することが多い。

4)この両都市は、平和や原爆に関連する文脈においてカタカナで表記されることが多いため、通例に従う。

5)本稿における「まなざし」の定義は、Urry(1990)による「社会的に構築された視覚の在り方」に依拠している。まなざしとは、対象をまなざす側の価値観や規範に従わせようとする支配力や方向づけのことである。

6)本稿では、Urry(1990)の『The Tourist Gaze』を日本において一般に訳される「観光のまなざし」ではなく、「ツーリストのまなざし」と表記する。

7)軍艦島には 3 つの遊郭があり、「本田」、「森本」は日本人用、「吉田」は朝鮮人用の遊郭であった(黒沢,2013)。強制労働を否定しがちな右派の言説では、高い頻度で「吉田」が紹介され、朝鮮人も日本人と同様に遊郭を楽しむことができたため、強制労働はなかったと主張することが多い。一方で、左派の言説では遊郭の存在を言及していないことが多い。

8)左派の記述では鉄条網の存在が度々指摘されるが、右派の記述ではほとんど見られない。

9)敗戦までの 20 年間に軍艦島で亡くなった朝鮮人は 122 人、中国人は 15 人であった。

10)日本では、1990 年代以降に「廃墟ブーム」とでも呼ぶべき現象が生じた。バブル期に放棄されたホテルや病院、遊園地などの廃墟を紹介する雑誌や写真集が多く出版され、軍艦島は「廃墟の王様」として扱われた(栗原,2006・2015)。

11)複数の遺産を一連のテーマでまとめて一件として世界遺産に登録する形式のこと。明確なテーマやストーリー性が求められる形式である。

12)2015 年 5 月 8 日 朝日新聞 朝刊 総合面

13)2015 年 5 月 29 日 中央日報

14)2015 年 7 月 6 日 産経ニュース

15)2015 年 7 月 6 日 朝日新聞 朝刊 総合面

16)2015 年 7 月 6 日 産経ニュース

17)2015 年 7 月 21 日 朝日新聞 朝刊 総合面

18)2017 年 12 月 2 日 朝日新聞 朝刊 総合面

19)産業遺産の世界遺産登録推進室 保全状況報告書 (http://www.cas.go.jp/jp/sangyousekaiisan/pdf/siryou_jp01.pdf) による。

20)2017 年 8 月 13 日 朝日新聞 朝刊 総合面

21)2017 年 12 月 8 日 朝日新聞 朝刊 総合面

22)2017 年 7 月 28 日 産経ニュース

23)2017 年 7 月 26 日 朝鮮日報

24)2017 年 7 月 26 日 朝鮮日報

25)2017 年 7 月 31 日 朝鮮日報

26)2017 年 7 月 31 日 朝鮮日報

27)2017 年 7 月 31 日 朝鮮日報

28)シマザキダイスケはドイツ軍を想起させる黒十字勲章(バルケンクロイツ)を付けている。

29)この場面は朴槿恵政権(当時)が「ろうそく革命」で打倒される様子のオマージュだと推測される。
30)2017 年 7 月 31 日 中央日報
31)2017 年 7 月 26 日 中央日報
32)2017 年 10 月 16 日 中央日報
33)2017 年 6 月 28 日 聯合ニュース
34)「真実の歴史を追求する端島島民の会」(https://www.gunkanjima-truth.com/l/ja_JP/library/映画『軍艦島』に係る声明文)による。
35)2017 年 10 月 11 日 長崎新聞 朝刊
36)現状の軍艦島ツーリズムにおいて、英語・韓国語・中国語でのガイド対応ができているのはＹ社のみである。

引用文献

東浩紀(2013a):『福島第一原発観光化計画思想地図 βvol.4-2』, ゲンロン
東浩紀(2013b):『チェルノブイリダークツーリズムガイド』,ゲンロン
市野沢潤平(2016):「楽しみのダークネス―災害記念施設の事例から考察するダークツーリズムの魅力と観光経験―」,『立命館大学人文科学研究科紀要』,110,pp23-60.
井出明(2013):『ダークツーリズム入門 #1 ダークツーリズムとは何か』,ゲンロンエトセトラ 7
井出明(2015):『ダークツーリズム・ジャパン』vol.1,ミリオン出版
井上博登(2010):「端島炭鉱 軍艦島の生活」,『社会情報』,19,pp211-217.
上野英信(1960):『追われゆく坑夫たち』,岩波書店
遠藤英樹(2016):「ダークツーリズム試論 ―ダークネスへのまなざし―」,『立命館大学人文科学研究科紀要』,110,pp3-22.
遠藤英樹(2017):『ツーリズム・モビリティーズ』, ミネルヴァ書房
川崎茂(1973):『日本の鉱山集落』,大明堂
木村至聖(2007): 「コモンズとしての産業遺産--長崎市高島町における軍艦島活用を事例として」,『京都社会学年報』,15,pp141-168.
木村至聖(2009):「地域社会における産業遺産活用の可能性--長崎市高島町・軍艦島をめぐる事例から」,『労働社会学研究』,10,pp173-175.
木村至聖(2010):「軍艦島をめぐるヘリテージ・ツーリズムの現状と課題」,『社会情報』,19(2),pp.225-234.
木村至聖(2014):『産業遺産の記憶と表象』, 京都大学学術出版会
栗原亨(2006):『ワンダーJAPAN―日本の異空間探険マガジン(三才ムック vol.141)』, 三才ブックス
栗原亨(2015):『ワンダーJAPAN Collection 軍艦島と産業遺産(三才ムック vol.814)』, 三才ブックス
黒沢永紀(2013):『軍艦島入門』, 実業之日本社
柴田弘捷(2010):「記憶の無人島・軍艦島―廃墟の島・長崎県端島―」,『専修大学社会科学研究所月報』,566・567,pp59-75.
長崎在日朝鮮人の人権を守る会(1982):『原爆と朝鮮人 長崎朝鮮人被爆者実態調査報告書 第 1 集』, 長崎在日朝鮮人の人権を守る会
長崎在日朝鮮人の人権を守る会(1983):『原爆と朝鮮人 長崎朝鮮人被爆者実態調査報告書 第 2 集』, 長崎在日朝鮮人の人権を守る会
長崎在日朝鮮人の人権を守る会(1984):『原爆と朝鮮人 長崎朝鮮人被爆者実態調査報告書 第 3 集』, 長崎在日朝鮮人の人権を守る会
長崎在日朝鮮人の人権を守る会(1986):『原爆と朝鮮人 長崎朝鮮人被爆者実態調査報告書 第4集－端島の呻き声 発掘「端島資料」が問いかけるもの』, 長崎在日朝鮮人の人権を守る会
長崎在日朝鮮人の人権を守る会(1991):『原爆と朝鮮人 長崎県朝鮮人強制連行、強制労働実態調査報告書 第 5 集－7 万人探訪の旅』, 長崎在日朝鮮人の人権を守る会
長崎在日朝鮮人の人権を守る会(1994):『原爆と朝鮮人 第 6 集 佐賀県朝鮮人強制連行、強制労働 実態調査報告書―恨の佐賀平野 もう一つの石炭史』, 長崎在日朝鮮人の人権を守る会
長崎在日朝鮮人の人権を守る会(2011): 『軍艦島に耳を澄ませば―端島に強制連行された朝鮮人・中国人の記録―』, 社会評論社
長崎在日朝鮮人の人権を守る会(2014):『原爆と朝鮮人 第 7 集－長崎市軍需企業朝鮮人強制動員実態調査報告書』, 長崎在日朝鮮人の人権を守る会
長崎在日朝鮮人の人権を守る会(2016):『増補改訂版 軍艦島に耳を澄ませば ―端島に強制連行された朝鮮人・中国人の記憶』, 社会評論社
長崎市(2016)『平成 28 年長崎市統計年鑑』, 長崎市総務部統計課
フンク,カロリン(2008):「学ぶ観光と地域における知識創造」,『地理科学』,16(3),pp160-173.
三菱鉱業セメント株式会社高島炭砿史編纂委員会編(1989):『高島炭礦史』,三菱鉱業セメント
Boorstin,D.J.(1962):The Image:A Guide to Pseudo-events in America,ブーアスティン,ダニエル(星野郁美・後藤和彦訳)(1964):『幻影(イメジ)の時代―マスコミが製造する事実』, 東京創元社
Foley, M.・Lennon, J. (1996): JFK and dark tourism: A fascination with assassination : International Journal of Heritage Studies, 2(4):pp198-211.
Foley, M.・Lennon, J. (2000):Dark Tourism:The Attraction of Death and Disaster. London:Thomson. Learning.
Foucault,M,(1963): Naissance de la clinique,フーコー,ミシェル(神谷美恵子訳)(1969):『臨床医学の誕生』,みすず書房
Frew,E.・White,L.(2013)Dark Tourism and Place Identity Managing and interpreting dark places.Oxon:Routledge.
Rojek, C. (1993) :Ways of Escape:Modern Transformations in Leisure and Travel. London:Palgrave Macmillan.
Seaton,A.V.(1996):Guided by the dark:form thanatopsis to thanatourism, International Journal of Heritage Studies , 2 (4):pp234-244.
Stone,P.R.(2016):Light and Shadow on Industrial Heritage,ストーン,フィリップ(井出明訳)(2016):『ダークツーリズム・ジャパン―産業遺産の光と影―』,東邦出版,pp8-9.
Tunbridge, J. E. and Ashworth, G. J. (1996) Dissonant Heritage:The Management of the Past as a Resources in Conflict.London:John Wiley & Sons.
Urry,J.(1990):The Tourist Gaze:Leisure and Travel in Contemporary Societies,アーリ,ジョン(加太宏邦訳)(1995):『観光のまなざし―現代社会におけるレジャーと旅行』,法政大学出版
Urry,J.(1995):Consuming Places,アーリ,ジョン(吉原直樹・大澤善信監訳)(2012):『新装版 場所を消費する』,法政大学出版

(いとう だいき 神戸大学大学院人間発達環境学研究科)